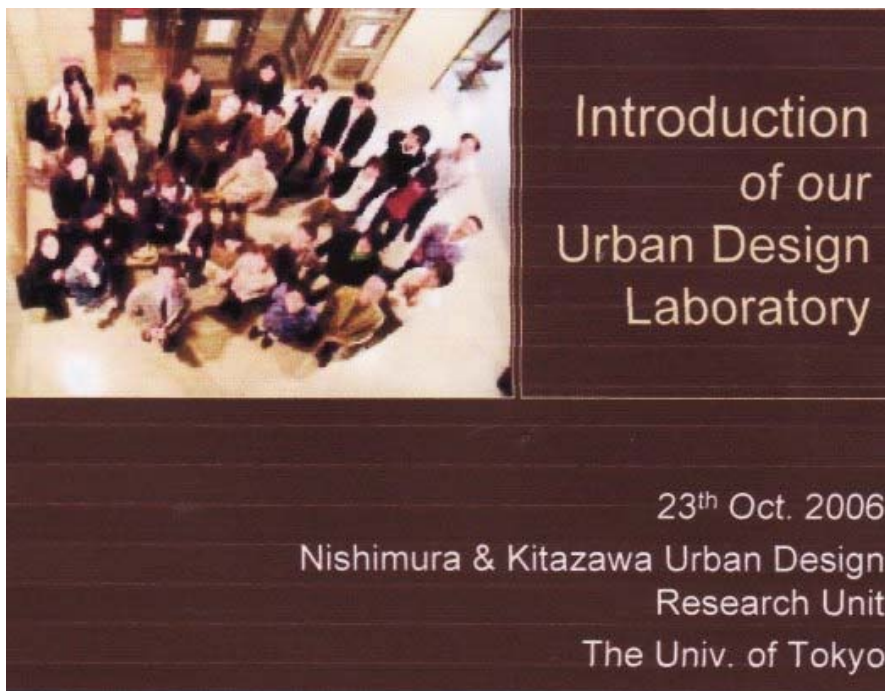


第4章 西村理論のパーステクティブ

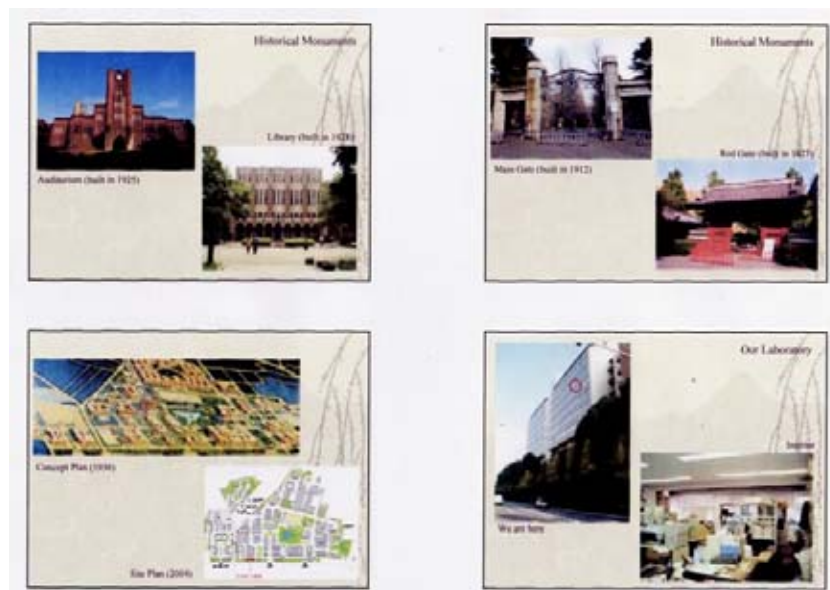
イノベーションの波頭

成功している観光地は、“観光”と“まちの生活”をあまり分離させることなく、もともとまちにある固有性を磨くことで、着実にファンをつかんでいる。(西村幸夫)『新たな観光まちづくりの挑戦』p.16。



研究室紹介

2004年11月ハノイ研究室旅行先のハノイ工科大学でのプレゼンテーションから



まちづくりプロジェクト

2004年11月ハノイ研究室旅行先のハノイ工科大学でのプレゼンテーションから

都市デザイン研究室は、まちづくりプロジェクトの出陣基地である。西村はこの14号館9階の教授室で観光まちづくりの想を練ってきた。向き合っている1号館前の広場が荒廃していたのが、2008年に学内コンペでリニューアルされた。応募した都市デザイン研究室の修士チームは入賞した。

また、これも先年のある日のこと、14号館の地下からガス漏れの危険があるというので、消防車が何台も出動した。同館が立ち入り禁止になり、都市デザイン研究室メンバーも1号館前広場に避難した。幸いガス爆発は起こらなかったが、室員たちが広場で中島、野原を囲んで延々と事態を見守るなかに、通りがかった私もいて連帯感を感じたものである。工学部棟は、ミステリーにも通過地点としてはあるが登場する。「本郷通り沿いには本部キャンパスの塀が切れ目なく」とある一点が、14号館なのである。

旅情ミステリーによる関係地の描写

佐藤亜有子『東京大学殺人事件』(河出書房新社、1999年)

夏期休暇を間近に控えた午後のキャンパスは、静かながらもあちこちに学生の姿が見え、図書館前広場の噴水も、涼しげな飛沫を散らしていた。長津は石畳の地面の照り返しに目を細め、広場のはずれに位置する文学部三号館のさらに向こう、鬱蒼と樹木の茂ったあたりを目指していった。時刻は五時を回ったころ、桂木にだまされたのではないならば、そこにかのご婦人、御妙寺優佳がいるはずだった。長津は石段を下りて、まず額の汗を拭った。このあたりは微妙なくぼ地になっていて、濃く繁った緑で風が遮られているせいか、むっとするような湿気が肌に迫ってきた。それでもじかに日差しを浴びているよりは、枝葉の影がしのぎやすく、土のおいもどこかひんやりとして感じられた。木陰をくぐって三四郎池のほとりに出て、長津はあたりを見まわした。(pp.13~14)

やがてその姿は、自転車の曲がったあたりを同じ方向に消えていった。長津は少し足を速め、工学部施設が延々と続く石畳の坂を下った。そしてようやく角にたどりつくくと、喜多川はゆるい坂道の下にある見慣れない門を目指していた。(p.207)

電信柱に目をやると、そのあたりの住所は弥生となっていた。そばの刑事に目をやると、地名から取ったものなのだろう、門の名前も弥生門となっていた。喜多川は工学部裏手の塀沿いに坂を上っていて、長津はその背中が見えるか見えないかの距離で、ゆっくり歩き出した。路のわきには名前だけは聞いたことのある弥生美術館があり、入り口わきには竹久夢二のポスターが貼ってあった。やがて坂の上方に、広い通りが見えてきた。喜多川は赤信号で立ち止まり、青に変わってすぐに向こうに渡っていった。長津は足を速めたが、通りの向こうは農学部キャンパス沿いの塀で、あたりはがらんとした感じで適当な隠れ場所もなく、ためらううちに信号がまた赤になった。仕方なしに、路の反対側から見失わないよう喜多川のあとをつけていった。ここは確か言問通りで、交差点に向かって下る坂沿いには工学部のべつのキャンパスが、坂下には地下鉄の根津駅があるはずだ。(pp.207~208)

大学構内に入るには、正門はまだずっと先だ。それに本郷通り沿いには本部キャンパスの塀が切れ目なく続いていて、尾行に気づいた喜多川が故意に姿を消したのでないか、消えられる場所はない。(p.211)

やがて信号が青になり、前のタクシーが比較的ゆっくりと、交差点を通過していった。本部キャンパスのレンガ塀が左手に見えてきて、葉の濃く茂った銀杏の街路樹越しに、暗いレンガ造りの工学部施設が夜に沈んで見えた。(p.294)

理学部新館の前を抜けた。講堂わきから時計台前広場に続く細い階段の上に、桂木の頭がちらりと見え、長津はそれを目指して息もつかずに駆けていった。学食裏でコンクリートの壁が湿った感じの階段を上がりきると、広場には誰の影も見えなかった。(p.411)

身近なまちづくりが先



『観光まちづくり』の西村幸夫執筆「観光まちづくりを考える」は、息をのむイノベーションの波頭である。「まちづくりと観光の溝を超えて」「まちづくりと観光、それぞれからの観光まちづくりへの接近」「行政施策としての観光まちづくりの台頭」など、イノベーション的な接近、台頭というダイナミックな記述に引き込まれる。

注記にある『新たな観光まちづくりの挑戦』（2002年、ぎょうせい）における西村執筆の第1章第1節「まちの個性を活かした観光まちづくり」は、わずか17ページの叙述ながら、押し寄せるイノベーションの波浪を次々と動的に記述し、そのうねりを読者に理解させ高揚させ、全容をほうふつとさせる叙述である。そのイノベーションを感じさせる述語を斜体で引用する。

「観光まちづくり」という言葉はまだ生まれて間もない。来訪者と住み手の交流というスタンスから、「まちづくり」は「観光づくり」へと**拡がりつつある**。(p.16)

観光まちづくりは、ある意味で、観光産業が主導する従来型の観光地整備や観光商品開発とは**一線を画す**、地域の生活者に主眼を置いた新しいまちづくりの努力なのである。(p.17)

観光客の好みに合わせたテーマパークを作っているのではなく、もともとのまちが持っている固有性を見出し、磨き、光らせることによって、訪れる人にとっても住む人にとっても、いいまちになっているのである。従来の観光開発は観光資本と観光資源、そして観光客が3大要素であり、その調和が最大の目標であった。そこには地域社会という**視点が欠けていた**のである。(p.21)

これらの調和を実現することは容易ではない。来訪者の増大によって地域の資源が劣化することも考えられる。いわゆるキャリング・キャパシティ（収容力）の問題である。観光客のお目当ての資源が地域の住民と何の接点も持たない場合は住民にとって来訪者は**はた迷惑以外の何者でもない**ことになる。(p.22)

ここで**思考法を逆転**して、まちづくりの側から考えてみよう。たとえば、地域の資源は地域住民のまち自慢のもとであるとすると、そこに来訪者がいることは居住者にとっても自慢しがいのあることだということになる。居住者の生活がまちづくりの中心であるとすると、それを尊重する人こそが来訪者だということになる。また、来訪者が交流相手だとすると、住民との間の摩擦もずっと少なくなるだろう。また、地域のまちづくりの結果として来訪者が増えるのであって、**その逆ではない**。何も余分なものがないことでさえまち自慢の1つになるのであるから、まち自慢のネタは絶えることがないといえる。(pp.23~24)

こうした観光まちづくりの議論を広く各地で進めてもらうために、研究会を組織し、「観光まちづくりガイドブック」を2000年に作成した。まだまだ完璧なリストからはほど遠いが、従来型の観光地整備とはひと味もふた味も異なるアプローチの様子は見て取れるだろう。こうした観

光まちづくりの手法は、これまで在来型の観光地の色彩に染まっていないところのほうが向いていると思われるかもしれない。確かにそうした側面は否めない。しかし観光に大きく依存している在来の地域でも観光まちづくりと呼べる活動は長い歴史を有している。(p.27)

在来型の観光地の典型でもある別府では、在来型の温泉観光地に対する危機感が、もう1度足元を見つめ直し、まちへの期待と自信を回復させることを目指す観光まちづくりへと向かわせたといえるだろう。(p.30)

住んでいる人たちが悦ぶところにこそ、遠来の人も訪れるのである。身近なまちづくりが先であり、その結果として評判が周囲に拡がり、遠くの人も訪れることになるのだ。近きものにとって魅力のないようなまちに遠くのひとつが来るはずもないだろう。(p.32)

都市デザイン研究室の各プロジェクトは、新学年ごとに新人が自由に選択して参加する。かけもちも自由である。そして、研究室プロジェクトという言い方でなく、研究室有志という慎重な表現を用いている。そのために自由闊達な活動が学生たちの知性と情熱で試みられていくことは、西村流儀の妙策である。しかし、まだ「観光まちづくりプロジェクト」は掲げていない。

「観光まちづくり」は、国土交通省の観光政策審議会で生まれた用語であるが、その点に官公色がつきまとい、市民スタンスのまちづくり側からすればもどかしさがある。観光産業もどちらかという官公寄りであり、総じて官公カラーへのアレルギーをなくするために、西村の言動を濾過して伝えられる「観光まちづくり」ならば、それが素直に受け入れられる下地になろう。

私もお上カラーの「観光まちづくり」広報にはアレルギーを持っているので、もっぱら西村語録から「観光まちづくり」を吸収している。その西村幸夫編著のその名もずばり『観光まちづくり』が刊行されたことで、急速に社会の認知は広がっていると思われる。私も東大生協書店でそれを見つけ、西村テキストであるならば、その一冊にこだわって徹底的に勉強しようと思いついたのである。国土交通省あたりの刊行物では、タイトルが「観光まちづくり」とあっても、その思いに駆られることはなかった。

まち自慢と地域マネジメント

『観光まちづくり』の表題は、それに「まち自慢からはじまる地域マネジメント」の副題がつけられている。主題だけでもよさそうなものを、わざわざそうした副題をつけている点に、西村もしくは出版社の慎重さがうかがえる。しかし、その副題が「まち自慢」という住民的な語彙と「地域マネジメント」というお役所用語的な語彙が投入されている点に、編集討議の過程が垣間みられるのである。こうした硬軟用語間の駆け橋ができるのは、市民スタンスで研究室のプロジェクトを発展させる一方で、行政の審議会・研究会で活躍している西村をおいてない。

このまち自慢は、「まちの宝」と言い換えてもよさそうであるし、英国のシビックトラスト日本人第1号だった私としては、「プライド・オブ・プレイス」を連想し、「まちの誇り」を思ってしまう。将来『観光まちづくり』の改定版が出るときには、東大まちづくりプロジェクトの総括を補足して、副題に「東大都市デザイン研究会プロジェクト」をうたってほしい気持ちである。

ところで、創刊以来100号をはるかに突破している『都市デザイン研マガジン』の悉皆調査をした結果では、このまちづくりプロジェクトの報道は、かなりの量を積み重ねてきている。しかし、新旧学生の「別れのことば」や「都市デザイン研究室志望の理由」に、なぜかまちづくりプロジェクトのことを書き込む例が少ない。それが不思議でならなかったが、最近ようやくその言葉が、『都市デザイン研マガジン』のアンケート回答に現れるようになった。

『観光まちづくり』が刊行されたことのほかに、都道府県庁所在地や新宿区の景観調査の結果が、『季刊 まちづくり』に連載されたり、『新宿区景観まちづくりガイドブック』のように、調査から編集まで「新宿プロジェクト」の各チームが行ったりした体験などが、影響しているのであろうか。

旅情ミステリーの活用

ところで、私は観光まちづくりには、文学ものの活用も必要と考え、一例として旅情ミステリーに描かれたその土地の描写を読みながら旅に出ている。

内田康夫の『風の盆幻想』、西村京太郎の『越中おわら風の盆殺人事件』や和久峻三の『風の殺意・おわら風の盆』とか、内田康夫の『鞆の浦殺人事件』、木谷恭介の『飛騨高山殺人事件』、内田康夫の『横浜殺人事件』とか、佐原も出てくる菊村到の『あやめ祭殺人景色』、本稿で前述の大井川鉄道SLツアーの場合は木谷恭介の『大井川SL殺人事件』、喜多方周辺では、金久保茂樹の『奥会津隠れ里伝説殺人事件』、新宿は南秀男の『新宿殺人遊戯』、私のツアーコン研修の場合は、西村京太郎の『東京湾アクアライン十五・一キロの罟』などである。

東大プロジェクト基地あるいは隣地に関わるミステリー作品もある。越中八尾は、高橋治の恋愛小説『風の盆恋唄』で一気に知られるようになったが、まちの描写は推理小説の方が案外参考になる。

こうした旅情ものは表題に地名を冠しているために、書店で目につきやすい。これら旅情ミステリーはその土地の紹介がきりっと締めて書かれ、一読そのまちの全容が凝集して吸収される。知力を要するミステリー分野では、学問の場で使う「概念規定」という語を用いて作品分析もされている。たとえば、有栖川有栖の『山伏地藏坊』（創元社文庫、2002年）巻末の戸川安宣解説は、次のように概念規定のまとめに力を入れている。

ここで概念規定を纏めてみよう。「安楽椅子探偵」とは、まず探偵役が一切捜査に関する行動を起こさず、報告書の話の聞いたり新聞その他の書類に目を通して得た材料だけを基に、推理し、真相を言い当てる。以上の条件に当てはまる作品が、シリーズの大半を占める場合、その探偵を「安楽椅子探偵」と称する。（pp.355～356）

本稿は、東大都市デザイン研究室のまちづくりプロジェクト活動を通して、観光まちづくりへの可能性を高めるにはどうしたらよいかという志向性で、それらの活動を取り上げてきた。ところが、西村幸夫は、飛騨古川以来まちづくり活動のキャリアが長く、大著『都市保全計画』（東大出版会、2004年）においても、まちづくりに紙幅を割き、「観光は皮相的な地域理解や安易な地区の売り出しを誘発する危険性も孕んでいる。観光の持つ可能性と危険性をともに認識する必要がある」と指摘している。

観光をたんに結果としてのみとらえるのではなく、駐車場や適切なアメニティ案内サイン、飲食施設などの来訪者関連施設の計画をあらかじめ立案しておくことは必要である。特にその都市や地区を対外的にガイダンスし、都市の歴史や構造をよりよく理解してもらうための用意は周到におこなうべきである。こうしたガイダンスや地域理解のための各種表示は地域住民のためにもなる。他方、来訪者のための施設と地域住民のための施設との共存や棲み分けが工夫される必要がある。（pp.23～24）

都市保全によって来訪者が増加することが予想される場合には、それによって生活者の環境が過度に変容することのないように、また都市全体が過度の観光依存に陥ることのないように監視

する必要がある。来訪者への適切な対応を計画に織り込むことによって観光による負のインパクトを抑え、都市をサステイナブルに保つことが課題となる。(p.39)

観光客を含めて「来訪者」と称したのは、ボランティアまちづくり側の抵抗感を緩和する配慮と思われる。このように用意周到な西村流儀であるが、『観光まちづくり』の刊行を実現して以後は、社会の「観光まちづくり」に対する認知が促進され、『都市保全計画』の改訂版では、「観光まちづくり」の用語が正式に登場しよう。社会的認知については、マスコミがこの語を使い始めれば、一挙に広まる可能性がある。

本稿の執筆に当たり、かなり観光関係の図書に「観光まちづくり」の記述を追ったところ、次のような認識が行われていた。

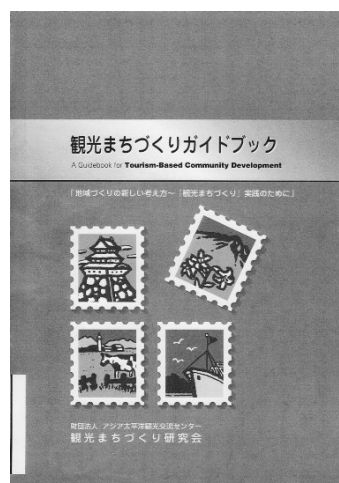
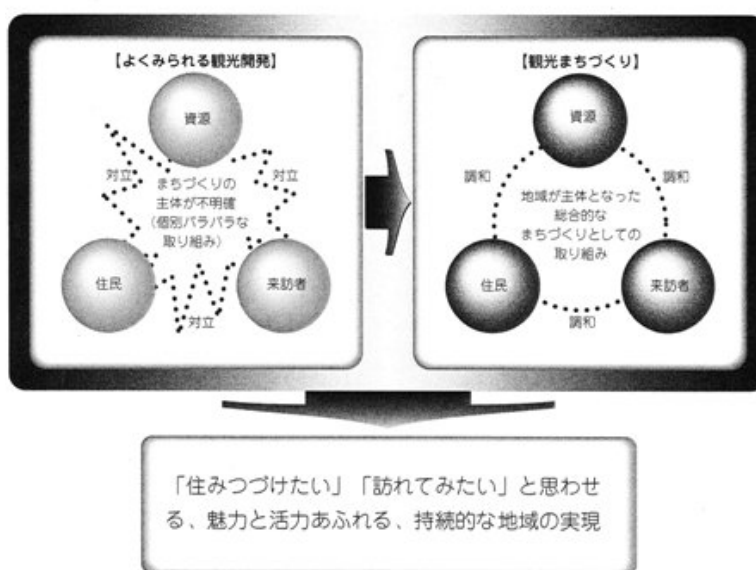
観光からのまちづくりは、外国人 tourist のためだけでなく、住民の精神的な豊かさの形成においても重要な役割を果たすものであるといえる。そのため、近年においては観光研究が単なる国際観光対応のための観光論や観光の現象分析から、実際の観光まちづくりに関心を移すことが緊急の課題になっていることを認識したい。(2001年12月8日観光まちづくり学会創立総会における初代会長安藤昭岩手大学教授メッセージ)

表題に「観光まちづくり」を関した図書は、まだほとんど書店で見られない。ようやく見つけたのは、安村克己著『観光まちづくりの力学』(光文社、2005年)と安島博幸著『観光まちづくりのエンジニアリング 観光振興と環境保全の両立』(学芸出版社、2007年)である。安島は、国土総合研究機構観光まちづくり研究会代表で土木系である。観光まちづくり学会会長の安藤は、景観・都市工学系である。『観光まちづくりのエンジニアリング』は、よく分かる平明な書き出しである。

最近“いきいき”という言葉をよく耳にするようになった。これまで「まちづくり」と「観光」は別ものと考えられてきたが、今はこの二つは急速に接近している。それは、それぞれの分野で大きな変化が起きているからである。(p.3)

内容は、エンジニアリングとあるだけあって硬めだが、観光まちづくりは、実はこうした土木エンジニアが支えているのであるというメッセージによって書かれた本である。

図 観光まちづくりの概念と意義



観光まちづくりの考え方の図(『観光まちづくりとガイドブック』p.6、『新たな観光まちづくりの挑戦』p.23)

< 『観光まちづくりガイドブック』 >

『観光まちづくりガイドブック』（アジア太平洋観光交流センター、2000年3月）は、同センター観光まちづくり研究会の協力で生まれたものである。『観光まちづくり』（p.21）で、西村は次のように述べている。

運輸省運輸政策局観光部の主要メンバーと各界の学識経験者からなる観光まちづくり研究会（主査西村幸夫）が1998年頃から検討を開始し、2000年3月に『観光まちづくりガイドブック～地域づくりの新しい考え方～「観光まちづくり」実践のために』として発表している。これは当時議論が進められていた観光政策審議会としての最後の答申（直後に予定されていた省庁再編によって審議会も再編されるため）の柱の一つとして用意されたものであった。

同ガイドブックはその冒頭において「観光まちづくり」という言葉が多くの人にとって聞き慣れないものであることを認め、この「新しいまちづくりの考え方を少しでも多くの人たちに伝え、実際に取り組んでいただくことをめざしてつくった」（p.3）と述べている。

『観光まちづくりガイドブック』も『新たな観光まちづくりの挑戦』も絶版になっているので、国会図書館でコピーしたが、10年前の西村幸夫の先駆的思索と活動をあらためて知ること、深い感銘を覚えた。行政施策というと、とかく役所的と感じてなじみにくいこともあるが、市民運動の支援者で市民スタンスの西村幸夫による、または濾過した論は素直に受容できる。「西村観光まちづくり」への共感と高揚である。

観光まちづくりとは何か

西村の観光まちづくりとは何かの理論構成は、時間とともに深められているが、『観光まちづくり』のまえがきは、思索の経緯について要を尽くして簡である。その意味で、ほぼ全文を次に掲載したい。

これは、実験的な本である。

当初、学芸出版社の編集者から本書の提案をいただいたとき、私は編者としてまちづくりのさまざまなひろがりの中で観光の問題をとりあげて一書を組み立てようと考えた。これまで歴史的環境の保全や景観の整備について関わってきた身として、そうした地域が来訪者にも好まれ、いわゆる観光地としても活性化してきた事例をいくつも経験している。その経験の先に「観光まちづくり」を構想したいと考えたのである。「観光まちづくり」という用語自体、10年ほど前に当時の運輸省観光部のメンバーとおこなっていた研究会で生み出した概念で、その現場に立ち会っていた人間としてこうした考え方に責任と同時に愛着があったということもある。現場にいた証人のひとりに現在の観光庁長官である本保芳明氏がいた。当時たしか彼は運輸省の観光部企画課長だった。

ところが表題を仮称ながら『観光まちづくり』として、その構成を考え始めると、別の視点も必要であるということを実感するようになってきた。まちづくりが観光へ向かうという動きだけでなく、観光地がまちづくりへひろがるという動きも同様に存在するからである。後者の動きは観光地づくりとしてはまだマイノリティではある。しかし、こうした感覚を持った観光地が実際に成功してきているのも事実である。ここに今後の観光の可能性を探りたいと思った。この動きを支援するためにも、観光からまちづくりへという流れを本書で是非紹介したいと思うようになった。

そこでこの分野で長い経験を有している財団法人日本交通公社のスタッフの力を借りること

として、同研究調査部長である梅川智也氏を中心としたメンバーに協力を仰ぎ、観光地からまちづくりが育っている事例やその背後の論理を数多く紹介していただいた。本書の編集協力として財団法人日本交通公社の名前が挙がっているのはそのような事情による。

ただし、まちづくりの側から観光の問題へ徐々に関わるようになっていった編者としては、両者の協働作業はまだかならずしもじっくりいっているとは言い難い。各所に両者の考え方の相違が散見されるのもいたしかたのないことかもしれないと感じる。こうした双方の論理が混じり合っていて論が進められていることも、両論を立てることで見えてくる観光まちづくりの将来像を模索したいという本書の実験の一部であると理解していただきたい。

本書は3つのパートから成っている。part 1は、観光まちづくりとはどのような考え方なのかという総論をまとめた部分である。part 2では、日本各地での観光まちづくりの実践例を紹介した。このなかにはまちづくりから観光へ至った例も観光からまちづくりへ広がった例も、含まれている。part 3は、今後のあるべき観光まちづくりへ向けた理論編である。本書の副題が示すように「まち自慢から始まる地域マネジメント」がこの国における今後の主要な地域経営の戦略のひとつとなることを筆者たちは予想している。(以下略) 2009年1月 西村幸夫

次に『観光まちづくり』総論編「観光まちづくりとは何か」も重要である。「まえがき」につづく総論編のトップが西村の「観光まちづくりとは何か まち自慢からはじまる地域マネジメント」である。「はしがき」を近景とすれば、中景ともいべき規模の解説であり、必須のテキストである。

そこでは「まちづくりと観光の溝を超えて」を掲げ、「相反するまちづくりと観光」について述べ、次いでその止揚として両者それぞれからの接近に注目しつつ、結論は地域主体に落としていく。「地域社会の側からの再出発」というわけである。長年まちづくりに関わり、それに通暁している自身のいわばホームグラウンドに重心をおいての立論は、現実的に最も発言権を持ち得るスタンスであることを意識してのことであろう。

しかし、観光よ、そちらの側からも呼応し、「観光側からの再出発を」という要請を含む両者止揚・融合の相はどのようなのもであろうか。今後の西村理論と実践が、ますます注目されるゆえんである。次は、西村総論編「観光まちづくりを考える」の紹介である。

地域社会と地域環境と地域経済

「もともと」という書き出しで書かれている「相反する」まちづくりと観光は、向いているスペクトルの向きが「まったく」異なっていると看做す。どう違うのか。まちづくりとは、基本的に地域社会を基盤とした地域環境の維持・向上運動である。対して観光は資源としての地域環境の利用活用をベースとした地域経済の推進活動であるとする。

まちづくり活動を知り尽くしている西村は、まちづくり活動家が観光という言葉が好きでなく、観光客は身勝手に地元迷惑をかけるよそ者という先入観があることを認める。観光側は地域との摩擦を避けて、距離をとってきた面が多いが、一過性で地元の意識には無関係に、観光客の目と舌を楽しませ、利潤の上がることだけで上がりとしていく。

これまで長くまちづくりを支援してきた西村にとって、ことにまちづくり派に対する気遣いは必要である。この『観光とまちづくり』は、研究室内部の起爆剤になったばかりか、まちづくり活動派の起爆剤にもなるから、西村の決意は並み並みならぬものがあつたはずである。出版社の度重なる要請を受けて熟慮を重ね、やっと踏み切った刊行だったのである。

それは理論構成にかかっているが、西村はここで「地域社会」と「地域環境」と「地域経済」の三つどもえの関係の相互補完について論じながら、それを観念論に終わらせないために、これが観光まちづくりであるという事例を織り込むことを条件にした。

「全体の傾向として、まちづくりはしだいに観光の重要性を認識するようになり、観光的なアクティビティへと接近しつつあると言うことができるだろう」と、「接近」と「しつつ」の視線で性急な評価を避けながら、事例を選んだ。

実例として、分かりやすい既存温泉地の再生例を指摘していくが、西村観光まちづくりコンセプトには、観光とまちづくり双方の接点を調和とバランスで融合させたいという目的意識がある。諸刃の剣の観があるこの問題を解くには、地域に焦点を定める以上、まちづくり派の嫌う用語「商品」について、みずからも批判を加えながらも、「いかなるプロダクトも商品という性格を帯びざるを得ない」と、現実的な解釈でまちづくり派に対して説得するという配慮をみせている。

そこにおいては、まちづくりへの想いが込められているなら、その分だけ固有な商品といえることまでいって、反対、嫌いだけではすまされない現実の覚悟をまちづくり活動派に示していかざるを得ない立場がうかがえるのである。

観光サイドで通常用語となっている「旅行商品」という表現は、まちづくりサイドではいつまでたっても違和感がぬぐえないと言わざるを得ない。「商品」という表現に売り手と買い手という超えがたい立場を実感し、さらには自分たちの住む地域が商品として経済行為の対象になっているという疎外感をそこに感じるからである。自分たちの住む地域には、貨幣価値には換算できないかけえのない意味があるのだと思うと、その疎外感はさらに高まることになる。(pp.26~27)

といったことまで分かり抜いている西村が、商品やマーケティングといった用語をめぐってのいたずらな議論をするのを超えて、「地域マネジメントの問題としてとらえるならば、両者にはアプローチの違いを超えた共通課題が見えてくる」(p.27)として、『観光まちづくり』のサブタイトルにある「地域マネジメント」に焦点を結ぶ到達点で、総論を結んでいるのである。

<「観光とまちづくり」全文(月刊『建設』)>

次は、月刊『建設』2009年2月号の巻頭言「観光とまちづくり」である。『観光まちづくり』の上梓直前に書かれた率直な西村コンセプトのよりキメ細かい総括的論考で、西村理論を学ぶよきテキストといえよう。ここでの表題は、「観光まちづくり」とせず、「観光とまちづくり」と言葉を選んでいるが、価値の高い文献であるため、これは全文を紹介する。

これまで相性が悪かった「観光」と「まちづくり」

どう考えてもこれまで「観光」と「まちづくり」は相性が悪かった。

観光は基本的にビジネスであるが、まちづくりは基本的にボランティアである。

観光は入り込み客数といった数値が厳然として現状を表すが、まちづくりにはそのような数値基準は存在しない。地域の活性化といった漠然とした気分がある意味で関心事であり、これらを数値化すること自体あけすけな行為のように思えて気が進まないというのがまちづくり関係者の正直な気持ちだろう。

観光は個々人の努力を基本に成立しているが、まちづくりはみんなでいっしょにやることに意義がある。観光は地域経済が主たる関心事であるが、まちづくりの主たる関心は地域社会にある。ところが観光は地域社会とは摩擦をおこしがちである。なぜなら観光によって地域環境が劣化することが往々にしておこるからである。一方で、まちづくりは地域環境を大切にするもの

の、地域経済に対してはそれほど大きな力は持ち得ない。

このように観光とまちづくりは相容れない部分が多かった。

ところが近年「観光まちづくり」といったことがしばしば使われるようになり、両者の接点に関心事となってきた。かくいう筆者もこの2月に『観光まちづくり-まち自慢から始まる地域マネジメント』という編著書を刊行予定である。どうしてこのようなことが起こってきたのだろうか。

観光からまちづくりへの接近

観光がまちづくりへと接近してきている現状は、温泉街を考えればよくわかる。バブル景気までの温泉街はそれぞれの宿が借金をして巨大なホテルへと変身し、温泉客を宿のなかへ囲い込むことを競い合ったと言っている。お互いの宿はライバルだった。こうした競争はパイが拡大しているときは機能するが、バブルがはじけて以降の日本社会では通用しない。立ち行かなくなったホテルが廃墟のように建っている温泉街でひとり勝ちしても温泉街そのものが沈没していくなれば将来は明るくない。温泉街対温泉街の競争が始まっているのである。

温泉街同士の争いの場では、個々の努力もさることながら、いかに一体のまちとして温泉街そのものをもり立てていくかが命運を分ける鍵となる。そうした行為こそまさに「まちづくり」なのである。

小樽、函館、喜多方、越中八尾、飛騨古川、白川郷、長浜、近江八幡、若桜町、熊川宿、高野町、福山市鞆の浦、豊後高田 これらはいずれもこのところ観光客が伸びているまちである。これらのまちに共通しているもの、それはいずれのまちも歴史があり、まちとしての厚みがあることである。かならずしも超弩級の観光資源があるわけではないが、立ち寄りたくなるお店があり、魅力的な通りがあり、美しい風景があり、話を聞きたくなるカリスマがいて、心躍る祭りがある、そんなまちなのである。

つまり、住みたくなるようなまち、そんなまちが人々を引きつける。こうしたまちは自由競争社会で自然に生まれてくるわけではない。こんなまちに育ててきた住み手がいるのである。つまり、ここにはまちづくりがある。そんなまちが結果的に観光のうえでも活躍しているのだ。これを観光の側から考えると、観光客に媚びたテーマパークをつくるのではなく、自分たちが楽しく住めるようなまちをつくること、そのことがそのまま観光客に喜ばれる、そういったまちをつくるのが肝要なのである。

これこそまさしく、観光からまちづくりへの接近である。

まちづくりから観光への接近

同時にまちづくりの側もこれまであんなに用心していた観光へ次第に接近し始めた。まちづくりがサステイナブルであるためには、経済的な自立が欠かせないが、そのためには何らかの収入が外部からもたらされる仕組みが必要となる。特産品のプロモーションや新しい名物の開発、消費者と直接コンタクトする産直などさまざまな方法が試みられているが、なかでももっとも効果的なのが来訪者の増大である。

まち自慢がそのまま地域のマネジメントとなるような手法が次第にまちづくり活動家たちに受け入れられようになってきたのである。とりわけ将来の定住人口の増大が見込めないような地域では、交流人口へかける期待は大きい。地域のサポーターとして、半ば住人としてまちに入り込んでくれるような人をそれぞれのまちは求めているのである。

従来は、観光客というと自分勝手に、地域社会に理解がなく、ゴミと迷惑だけをおいていく異

邦人といったニュアンスが強かったが、グリーン・ツーリズムやエコ・ツーリズムなど、そうでない観光のスタイルも増えてきた。また、従来型の観光客であっても訪問がきっかけとなって地域のファンとなってくれる人もいないわけではない。

観光がまちの新しい地場産業として次第に認められて来つつあるのだ。来訪者が増えることによってまちに活力が甦るということも各地で実証されてきている。

観光とまちづくりの新しい関係を求めて

いま、「観光まちづくり」という新しい言葉とともに、観光とまちづくりの新たな関係を構築する時である。まちに元気を取り戻すためにも、住み手がいきいきとした暮らしを続けることが出来るためにも、まちが経済的にも自立していけるためにも、観光をうまく取り込んだまちづくりが要請されている。それはまた、従来型の観光の変革と再生につながるものである。

ここにはまちづくりがある。そんなまちが結果的に観光のうえでも活躍しているのだ。いま「観光まちづくり」という新しい言葉とともに、観光とまちづくりの新たな関係を構築する時である。まちに元気を取り戻すためにも、住み手がいきいきとした暮らしを続けることが出来るためにも、まちが経済的にも自立していけるためにも、観光をうまく取り込んだまちづくりが要請されている。それはまた、従来型の観光の変革と再生にもつながるのである。

この西村の双方からの接近というポイントは、野原卓によって、次の4分類で問われた。『季刊 まちづくり』19号(2008.6)の特集「観光まちづくりの可能性」のうち、「観光まちづくりを取り巻く現状と可能性」と題して論じたなかの「観光まちづくりにおける4分類」(p.30)である。関心のある試みである。このように手を変え品を変えて説明を工夫することで、人々は観光まちづくりに興味と親しみを持つようになっていく。

	現状(から)	手段(を用いて)	目的(へ)
タイプ1	観光	まちづくり	観光
従来型の観光地がこれまでの形態では立ち行かなくなり、コンテンツとして、まちづくりを含めた新たな観光スタイルを模索する。			
タイプ2	観光	まちづくり	まちづくり
観光地も持続的な居住地の一つであるという地域の誇りに立って、生活と観光の調和を図りながら、持続再生型の観光地をめざす。			
タイプ3	まちづくり	観光	観光
祭りや地域文化を大事にした結果、外部から多くの人々が訪れるようになったため、交流を含めた地域活性化に役立てようとする。			
タイプ4	まちづくり	観光	まちづくり
観光客や来訪者の観点をうまくとりいれ、地域の魅力や方向性を考えながら、観光と地域のまちづくりを動かすキッカケとする。			

窪田亜矢の「私たちのもの」論

観光客側の視点に立てば、町並みを歩くことは歴史や文化に触れることを通じて、日常から脱却することを意味している。町並みが、地域住民によって「私たちのもの」と感じられていることも感知するだろう。それもまた「私たちのもの」を失いがちな状況を生きる者にとって、日常から脱

却してわざわざ身をおくに値する風景なのである。あるいは自らの「私たちのもの」と感じている風景とは異なる「私たちのもの」があることを認識する機会でもある。(窪田亜矢)『観光まちづくり』pp.271～272。

観光の視点から考えるまちづくり



准教授窪田亜矢 東大都市工会議室 (2009.5)



工学院大学准教授時代 左端 (2005.8.3)

法定的都市計画とまちづくり的都市計画、その硬軟都市計画を縦横に駆使して、物事の狭間に論理を馳せている。これが、准教授窪田亜矢の『観光まちづくり』における「観光の視点から考えるまちづくりの課題」論考についての私の受け止め方である。

ツーリズムは非日常性である。非日常性を「巡る」ことに快感や愉悦を感じ、そのために、もともとは苦勞を意味するトラベルをするのである。観光とまちづくりが乖離していた時代には、乖離自体の意識もなく、地域民たちは、いわばエンクロージャーされた土地で、内輪の伝統と慣習と文化と経済による安堵と不安の中に生活していた。安堵も不安もその狭間も日常性である。

ところが、次第に外部の目、非日常性を求める観光の被写体になり始めた。そのことで、乖離が意識され、その融合を求めて試行錯誤の結果、観光まちづくりのコンセプトが生まれ、次第に機能するようになってきた。それを具体事例で解き明かす目標で刊行されたのが、西村幸夫編の共著『観光まちづくり』と、理解したい。

同書で取り上げられた肥前浜宿、鯖街道熊川宿、桐生、生野、喜多方、越中八尾、舞鶴、草津温泉、由布院、阿寒湖温泉などの成果は、すでにいくつも知られてきた。「観光まちづくり」という語を使わずに、観光まちづくり的なまちづくりは、解釈次第で無数にある。やはりより望ましいのは、観光まちづくりからいえば、それを冠したまちづくり、あるいはその運動であろう。

それはそれとして、地元の日常性に非日常性を求めた観光客が着地する場合、相反する理念は衝突するか、違和感、隔靴搔痒を感じる。高度経済成長期以後、ツアー社会慣れした人が大幅に増え、両者の接触に違和感を抱く向きが減少したものの、まだまだそれになじめない層は厚い。

その場合の地域住民と観光客の接点を、窪田は観光客が「日常から脱却してわざわざ身をおくに値する風景」として、旅先の町並みを評価しているのである。

この窪田の洞察は、日ごろ居住地において、「私たちのもの」という意識を喪失している観光客であるために、観光先の住民が「私たちのもの意識」を日常性として生きている風景に動かされるという指摘であろう。それは文明時評でもある。

窪田は『観光まちづくり』の最終10章を執筆しているが、全章のアンカーとしての重みがある。こうしたトリの場合、全体像の総括が通常である。にもかかわらず、それを「町並みまちづくり」というコンセプトと事象で受け止めているところに、町並みに対する並々ならぬ思いをみる。

窪田論考は、まずまちづくりの定義を掲げる。それは、第1章の西村幸夫の「もともとまちづく

りは地域社会と地域環境の維持・向上という内向的な問題意識から出発する」(p.13)を引用して、まちづくりは「地域社会と地域環境の維持・向上運動である」とした。

そうしたうえで、「しかし、そのように定義された内容は、ある日突然獲得されたものではない」と、緊張した内容に突入する。地域環境を構成する要素が、都市計画によって「壊されていくとき」という強烈な表現で、法定的都市計画の負を指摘し、それを地域社会に存在する資源として守ろうとする住民が、全国各地に現れて多様化した結果が、「まちづくり」という言葉で捉えられるようになった。そういう思考が、地域側についてのいわば傘になる窪田の問題意識である。

いまひとつ、観光側の定義や変遷については、17世紀の英国に生まれた「グランドツアー」から説き起こし、巡礼の旅や日本のお伊勢参りなどにつなげていく。グランドツアーとは、青年が家庭教師とともに、イタリアなどの壮大な歴史のある都市を旅して、人格形成を図る「修養の旅」だったとする。窪田の真摯な教育のバックボーンが人格形成にあること、それも「修養」という古風な語が使われることで、「町並みまちづくり」、そして「観光まちづくり」の深さをうかせている。

ところで、まちづくりプロジェクト基地に赴く都市デザイン研究室の学生たちは、拠点は小さくとも、壮大な社会実験をしている認識があり、それを通じて人格も形成されていくのである。きわめて多くの時間を学業に割かざるを得ない理系にあって、デスクワークでなく、思いもかけなかった地域というフィールドへの旅は、修養の旅といえないことはない。

窪田は、地域社会を「私たちのもの」とコンセプトする。自分の家は自分の所有であり、周辺を目にする場所であり、同時に周辺環境から見えているもの、すなわちみんなのものであること、私たちのものであることという認識の共有を説く。それは、町並み保存運動で生まれてヒットした「町並みはみんなのもの」というスローガンを思い出させる。

「みんなのもの」という一般的な表現よりも、「私のもの」という表現が多いところに、窪田亜矢のやさしい眼差しと人格をみる。この人格があってこそ、硬軟都市計画を論じて安堵感を人々に与えることができるのである。

まちづくりというと、大都市より地方都市が想定されるが、窪田は大都市の「都市観光」に言及し、そのために地域社会の「破壊」が正当化されてきた都市計画を突く。そして、生活の質の向上を図るために改善するまちづくり側に立って、「こうした状況は明確に否定されなければならない」(p.273)と指摘する。明かなスタンスである。このスタンスは、後述するように窪田の幸福希求意識に根ざしている。

「私ごと」のユニーク記述

研究室の窪田亜矢のホームページは、近況、研究テーマ、著作/研究論文、委員/学会、履歴、私ごと、研究室写真と分類されている。このうち「研究テーマ」と「私ごと」がユニークな記述で、人となりうかがえる。

前者は「人が幸せに生きるまちのスガタは、どんなものだろうか、またそれに近づくためにはどのようなアプローチがあるのだろうか？」の書き出しで、「しばしば苦境に追い込まれやすい人々の立場から考えてみると」と考えていく。そして、「以下のような場所は、どのようにあるのか、創り出せるのか？」と問い、自分の居場所と思える外部空間、他者と出会う空間、持続可能な生活の舞台の3つを列記している。

ここで思い当たるのは、 と はまさしく「観光まちづくり」の観光客に直結し、 はその地域住民の「私たちのもの」の生活ではないかということである。

「私ごと」は奔放にくだけて、ある日の記述は「桜が象徴するものって何だ？ 死なんだよ。息子が突然そんなことを言ってきた」で始まっている。文学部のウェブのようである。そして、つづく。

社会が共有している感覚 common sense が伝承されていく。その感覚を、実体験を通じて、自分のものとして共有する。あるいは共有しないと判断する。逆に common sense になりそうなものごとの捉え方に出会うと、それを誰かに伝たくなる。そういう個人的な作業を理論化することも研究の一部としたい。

とりまなおさず、このことは観光まちづくりが、誰かに伝え合いたい共有感覚によってなされていることにつながる。さらにある日の記述は、一編の散文詩である。

・自分の感覚を、小説の一小節が、驚愕するほど豊かに、ゆえに明確に、表現してくれていることがある。

・「非計画的な美しさ。そうね。間違いとしての美しさともいえるわ。美しさが世界から消えてしまうまで、ちょっとの間、間違いとして存在するの。間違いとしての美しさっていうのは、美の歴史の最後の局面なのよ。

・人間の時間は輪となってめぐるのではなく、直線に沿って前へ走るのである。これが人間が幸福になれない理由である。幸福は繰り返しへの憧れだからである。(ミラン・クンデラ『存在の耐えられない軽さ』)

都市計画学者が「非計画性の美しさ」や「間違いとしての美しさ」をうたう。詩人である。そして、幸福になれる理由より、なれない理由に惹かれることで、幸福への憧れを表現するレトリックは、窪田ホームページの「私ごと」の凄さである。

せわしない現代人の多くは、「巡り」をせずに直行、直情径行である。観光まちづくりにおけるツーリズムになぞらえれば、幸福はその「巡り」とリピートであるとの示唆である。『観光まちづくり』の窪田論考は結びの前で、「観光まちづくりは、観光を提供するという次元にとどまらず、意味をもたらすことによって人びとの人生を支えている」と書く。窪田のテーゼであろう。